

雨 ご い

むかし、村が、米づくりでくらしていたころのことです。

今年は、田には稲いねがすくすくと育っています。それを食いあらすウンカを追いはらうために、わら人形やたいまつたいまつを持った子どもたちの行列が、

ウンカの神さん出でござれ

実盛さねもりさんがお先だち……

と唱えながら、村の田んぼを回ります。そんな虫送りの行事も無事終わりました。

ところが、七月になって月末をむかえようとしているのに、今月は一つぶの雨も降りません。稲がどんどんのびようとする大事なときに、田んぼには水がありません。ひび割れがおきています。そんなときのために、村では、池を作つて水をためておきます。日照りが続くと、村役さんがみんなと相談して、水を引く順番を決め、いりいりのせせんせんせをぬきます。

「おい、うちの田んぼに水が入つたらんぞ。」

「そんなばかな、タンべ、池の水を引き入れといたが……。」

「となりのくそじじいが、ないしよで水を横取りしやがったな。」

こんなことがあつて、仲のよかつた村の人たちも、水がもどでおたがいうたがに疑いうたがの目で見るようになってしまいました。

やがて、池の底が見え、そこがひび割れを見せるようになりました。

「こりやあ、わやだがや。」

へ合なした

「神さんにおねぎやあしくちやあ。」

へ願い

と、村の人たちが相談して、村総代そうだいが多度神社たどへお参りに行くことにしました。

「どうぞ、雨のお恵めぐみをあたえたまえ。」

と、雨ごいをおいのりして、お札ふだを受けました。

村へ帰ると、氏神さんの境内けいだいにお札を祭つて、村人が代わる代わるお参りして、願をかけました。でも、三日たつても、四日たつても雨は降りません。

「お願いのしかたがたりんのだ。」

「まあいっぺん多度さんにおねぎやあしよまいか。」

ということで、再びまた総代が多度神社へお参りに出かけ、今度は、前のお札より上等の

お札を受けてきました。

村中総出で、笛や鐘やたいこを打ち鳴らして、お札にお願いしました。

「雨だ、雨だあ。」

「恵みの雨だ。」

空の一角に黒雲が現れ、それが広がってパラパラと大つぶな雨が落ちてきました。みんな大喜びです。大きすぎです。でも、それもつかの間のことで、すぐ雨はやんでしまいました。

「これじゃあ、みんなかれちゃう。一つぶの米もとれんぞ。」

「このままじゃ、生きていけないのう。」



「もう。どうしようもにやあなあ。」

と、村人たちは悲しみにくれ、力なくうずくまつてしまいました。

そのとき、

「天^{てん}焼^やきだ、天^{てん}焼^やきをやるみやあ。」

と、さけぶ声がしました。

「そうだ。天^{てん}焼^やきだ、天^{てん}焼^やきだ。天の神さんにおすがりしよう。」

「天^{てん}焼^やきやるまい。天^{てん}焼^やきやるまい。」

と、村人たちの声が、だんだん大きくなっていきました。

次の日、村の家々からわらやまきが集められ、それを村で一番高い高^{たか}根^ね山^ののてつぺんに、うず高く積^つみ上げました。

「神さんおねぎやあだ。雨を降らせてください。」

と、いのりながら、いつせいに火をつけました。火は、天をこがさんばかりに燃^もえ上がりました。

「なんとか、村をすくつてください。」

と、村人全員が、手を合わせていのりしました。

それから数日後、この村に、恵^{めぐ}みの雨が降ったということです。

雨ごいの行事は、どこの農村でも行われていました。

農業施設や技術のじゅうぶんではなかったころは、自然の恵みがたよりでした。しかし、それに恵まれないときは、神や仏にお願いするしか方法がありませんでした。それが、虫送りや雨ごい・天焼きなどの行事です。